

第12号 20円
昭和43年2月25日
内容

- 千人会の状況…………… 2
- 松下幸之助氏の寄付…… 3
- 第12回共同セミナー…… 4
- 第13回共同セミナー…… 6
- クリスマスの集い………… 7
- 利用状況…………… 9

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》 市下柚木
東京都八王子区426-42
電話 0426-42-4041~2
※3月24日より76-8511~2に変更
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル3階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京74590番
編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

このことは、セミナーの企画について、先ず問題になる。ちょうど月刊雑誌を創刊するときのようなもので、最初の数巻は大変優れた執筆者が選べるが、巻を重ねるにつれて執筆者の種が尽きてきて、一般の関心をつなぎとめることが困難になりがちのものである。そして、同じことの繰返しを悦ぶ、偏った固定読者だけが残ることになる。雑誌発行というのは商売だからそれでよいが、セミナー・ハウスは、特定の思想傾向のものの特権になっては困る。

この点、企画委員が有能のせいにか、今迄のところ、当館のセミナーは大変よい問題を広く選ばれている。勿論大学セミナーだから、アカデミックであることは当然であるが、将来は上品な問題ばかりでなく、もっと現代に切実なテーマも取り上げていただきたいと思う。セミナー参加の学生が、いわゆる優良学生だけに限られるのでは、本来の目的に副わないであろう。

情で創設され、経営されていることは申すまでもないことである。同氏のひた向きな純情、執心は、当代においてこの奇蹟を実現したといっても過言ではない。雄弁というのでもなく、愛想がよいというのでもない彼の突飛もない思い付きに、これだけ多くの賛同が得られようとは、失礼な言い方であるが、思い掛けないことであった。そして、いつか本紙にも載ったことがあるが、川原、西村、鈴木

木は諸氏のように、献身的に当館のために奉仕する篤志家があつて、人に関する限り、心配することとはなさそうである。ただし永い目でみると、こういう方々の犠牲的奉仕だけを当てにしているわけにはいかない。もっと若い人から、この事業の後継者が出てくるよう今から心掛けていくことが必要であろう。

各大学の教授諸氏の関心も大いに高まって、有意義なセミナーが

次々と催されていることも悦びにたえない。今日マスプロ化しつつある大学の教育と相補的な目的のため、大いに役立っていることは疑いのないところであるから、今後ますます利用が増すと期待しても間違いはなさそうである。

はあるが一時的のものである。幸いにして、この方の寄付はかなりの順調に進んでいる。しかし、日々の経営に対する費用の方は、大学からの会費以外、継続して得ることは困難である。学生からのセミナー参加費だけでは、諸物価の値上りの激しい当節、まかない切れのないが現状である。といって、赤字が出ないように値上げをすることも、多数の学生の参加を目的とするからには望ましいことではない。

広い階層といつても、もともと当館が大学教育の欠陥を補うためのものであるから、率先賛同されるのは大学教授であろう。大学教授といえれば貧乏にきまっているようなものであるが、自分の天職を遂行するのに効果あるこの施設に自分の寄与を、経済的にもすることを目指すのは、そう無理でもなさそうである。そのほか、この事業が有意義であることを認める諸賢にも、大いに参加していただきたいと考える。

在学中セミナーに参加した学生が、就職して社会人となり、いち早く会員になったことはまことに頼もしい。この二人とも、私学の卒業生であることは、偶然かもしれないが、国立大の卒業生との気質の違いがうかがわれるような気がするの、東大から上智へ移った私の僻目であろうか。

といつて、この費用を、例えば特定の個人、会社などから貰うのもまずい。そうすると、どうしてもイデオロギー的の制約を受けて、まったく自由なアカデリズムをそこなう心配がある。これらを考え合わせて、広い階層の千人の方々から、一年に一万円ずつ浄財を集めようというので考え出されたのが千人会である。

千人会への勧め

といつても、もともと当館が大学教育の欠陥を補うためのものであるから、率先賛同されるのは大学教授であろう。大学教授といえれば貧乏にきまっているようなものであるが、自分の天職を遂行するのに効果あるこの施設に自分の寄与を、経済的にもすることを目指すのは、そう無理でもなさそうである。そのほか、この事業が有意義であることを認める諸賢にも、大いに参加していただきたいと考える。



東京大学名誉教授

理学博士 山内 恭彦

といつても、もともと当館が大学教育の欠陥を補うためのものであるから、率先賛同されるのは大学教授であろう。大学教授といえれば貧乏にきまっているようなものであるが、自分の天職を遂行するのに効果あるこの施設に自分の寄与を、経済的にもすることを目指すのは、そう無理でもなさそうである。そのほか、この事業が有意義であることを認める諸賢にも、大いに参加していただきたいと考える。

在学中セミナーに参加した学生が、就職して社会人となり、いち早く会員になったことはまことに頼もしい。この二人とも、私学の卒業生であることは、偶然かもしれないが、国立大の卒業生との気質の違いがうかがわれるような気がするの、東大から上智へ移った私の僻目であろうか。

といつて、この費用を、例えば特定の個人、会社などから貰うのもまずい。そうすると、どうしてもイデオロギー的の制約を受けて、まったく自由なアカデリズムをそこなう心配がある。これらを考え合わせて、広い階層の千人の方々から、一年に一万円ずつ浄財を集めようというので考え出されたのが千人会である。

といつても、もともと当館が大学教育の欠陥を補うためのものであるから、率先賛同されるのは大学教授であろう。大学教授といえれば貧乏にきまっているようなものであるが、自分の天職を遂行するのに効果あるこの施設に自分の寄与を、経済的にもすることを目指すのは、そう無理でもなさそうである。そのほか、この事業が有意義であることを認める諸賢にも、大いに参加していただきたいと考える。

在学中セミナーに参加した学生が、就職して社会人となり、いち早く会員になったことはまことに頼もしい。この二人とも、私学の卒業生であることは、偶然かもしれないが、国立大の卒業生との気質の違いがうかがわれるような気がするの、東大から上智へ移った私の僻目であろうか。

といつて、この費用を、例えば特定の個人、会社などから貰うのもまずい。そうすると、どうしてもイデオロギー的の制約を受けて、まったく自由なアカデリズムをそこなう心配がある。これらを考え合わせて、広い階層の千人の方々から、一年に一万円ずつ浄財を集めようというので考え出されたのが千人会である。

といつても、もともと当館が大学教育の欠陥を補うためのものであるから、率先賛同されるのは大学教授であろう。大学教授といえれば貧乏にきまっているようなものであるが、自分の天職を遂行するのに効果あるこの施設に自分の寄与を、経済的にもすることを目指すのは、そう無理でもなさそうである。そのほか、この事業が有意義であることを認める諸賢にも、大いに参加していただきたいと考える。

在学中セミナーに参加した学生が、就職して社会人となり、いち早く会員になったことはまことに頼もしい。この二人とも、私学の卒業生であることは、偶然かもしれないが、国立大の卒業生との気質の違いがうかがわれるような気がするの、東大から上智へ移った私の僻目であろうか。

といつて、この費用を、例えば特定の個人、会社などから貰うのもまずい。そうすると、どうしてもイデオロギー的の制約を受けて、まったく自由なアカデリズムをそこなう心配がある。これらを考え合わせて、広い階層の千人の方々から、一年に一万円ずつ浄財を集めようというので考え出されたのが千人会である。

といつても、もともと当館が大学教育の欠陥を補うためのものであるから、率先賛同されるのは大学教授であろう。大学教授といえれば貧乏にきまっているようなものであるが、自分の天職を遂行するのに効果あるこの施設に自分の寄与を、経済的にもすることを目指すのは、そう無理でもなさそうである。そのほか、この事業が有意義であることを認める諸賢にも、大いに参加していただきたいと考える。

在学中セミナーに参加した学生が、就職して社会人となり、いち早く会員になったことはまことに頼もしい。この二人とも、私学の卒業生であることは、偶然かもしれないが、国立大の卒業生との気質の違いがうかがわれるような気がするの、東大から上智へ移った私の僻目であろうか。

といつて、この費用を、例えば特定の個人、会社などから貰うのもまずい。そうすると、どうしてもイデオロギー的の制約を受けて、まったく自由なアカデリズムをそこなう心配がある。これらを考え合わせて、広い階層の千人の方々から、一年に一万円ずつ浄財を集めようというので考え出されたのが千人会である。

(上智大学教授)

千人会

この人を見よ、この人にこそ

共鳴を呼び、早くも一〇〇名を越す

ごく内輪の方に千人会の趣意書を差し上げたのですが、二ヵ月ばかりの間に一〇〇名を越す程の申込みをいただいた。誕生日に寄付するという方法が意外に好評である。まともな生活をしておいて、元気で誕生日を迎えたら、次の日本を背負う優秀な学生の養成のために若干の寄付をするということは当然ですよとおっしゃる方もありますが、家族五人の若い先生方などにとっては、どんなにセミナー・ハウスの愛用者であっても無理なお願いです。住宅資金

の借金がすんでから千人会にはいますよといわれる先生もあり、こどもの教育が完了してからはいりませうという共稼ぎの方もある。一二月に三千円昇給したからその分だけ千人会へ回すという方もある。家庭の主婦の懐をねえと勧めますという二〇代の青年もあつた。政府の補助金なんぞ当てにしないで、民衆の力でセミナー・ハウスを維持してこそ自由な学問ができるのだから、といって雄々しくも入会なさる方もある。

大学問題を批判しているだけでなく、本当に大学教育が心配なら千人会にはいつて口先きだけの評論家でないことを証明すべきだという意見もある。締切りにならないうちにいつて早々と申込み下さる先生がいらつしやる。少し酒代を節約して千人会へ回すよとけなげな決心をなさつた方もおいでになる。

千人会の金は人間の善意が具体化した意味の深い財宝である。日本の教育史上画期的な効用を發揮させなければならない。

お茶の水女子大教授 松村 康平殿
 慶大教授 千住 鎮雄殿
 元都立高校教諭 鞍馬 菊枝殿
 都立大教授 半谷 高久殿
 国立大学協会主事 二宮 永蔵殿
 清水精工所社長 清水啓三郎殿
 慶大助教授 関本 昌秀殿
 松村石油研究所社長 松村信治郎殿
 早大教授 染谷恭次郎殿
 中央大学長 井上 達雄殿
 慶大教授 加藤 寛殿
 都立大名誉教授 五唐 勝殿
 旭硝子常務取締役 村上 正夫殿
 日本女子大教授 野見山不二殿
 慶大教授 塚本 寿一殿
 東京工大教授 西巻 正郎殿
 東大教授 野田 良之殿
 中央大教授 岩尾 裕純殿
 日本建築センター専務理事 三浦 忠夫殿
 共立女子大助教授 松島千代野殿
 東北放送監査役 内ヶ崎賢五郎殿
 立教学院事務局長 秦 二郎殿
 東京教育大教授 細田 友雄殿
 東大教授 小林 正殿
 慶大講師 師岡 孝次殿
 日大教授 小田切松義殿
 多摩電気工業取締役 釜池 善一殿
 セントラル硝子監査役 西村善四郎殿
 慶大講師 山口 喬殿
 日大教授 中山 知雄殿
 神奈川大参事 竹原 重松殿
 中央大助教授 増田 義男殿
 東大講師 高橋 三郎殿
 日興電気工業社長 吉田 修三殿
 野村不動産取締役 柴田 恭二殿
 京都大教授 福原満洲雄殿
 東洋アルミニウム人事部長 上谷 琢之殿
 東大名誉教授 久松 潜一殿
 セミナー・ハウス元職員 堀内 睦子殿
 東京工大助教授 鈴木 忠義殿
 立正大助教授 杉沢 新一殿
 早大教授 吉阪 隆正殿
 アラスカパルプ社長 笹山 忠夫殿
 都立立川短期大講師 吉田 幸弘殿
 東大助教授 高瀬文志郎殿
 都立大教授 関 嘉彦殿
 中央大教授 久松栄一郎殿
 立教大講師 大橋 泰二殿
 工学院大助教授 長坂 舜二殿

千人会の申込状況

第一回報告一〇〇名 (申込順)

 A 〇〇年額一〇、〇〇〇円
 B 〇〇年額 五、〇〇〇円
 C 〇〇年額 三、〇〇〇円

A 東大名譽教授 山内 恭彦殿
 A 慶大教授 佐原 六郎殿

A 飯尾眼鏡店支配人 飯尾 右一殿
 A 東大教授 丸山 真男殿
 A 日本長期信用銀行員 藤本 紘殿
 C セミナー・ハウス職員 飯田 能子殿
 A 一橋大学長 増田 四郎殿
 A 茅誠司氏夫人 茅 伊登子殿
 A 上智大教授 鈴木 皇殿
 A 中央大総長 升本喜兵衛殿
 A 清水建設常務取締役 玉真 秀雄殿

B 三井銀行掘留支店長 池田 有殿
 A 日本女子大助教授 一番ヶ瀬康子殿
 A 国立大学協会主事 中川 章殿
 C 青山学院大助教授 田島 恵児殿
 A 慶大専任講師 渡辺 彰殿
 A 佐藤喜一郎氏夫人 佐藤 直子殿
 C 青山学院大助教授 守永 誠治殿

A 旭硝子常務取締役 村上 正夫殿
 A 日本女子大教授 野見山不二殿
 A 慶大教授 塚本 寿一殿
 A 東京工大教授 西巻 正郎殿
 B 東大教授 野田 良之殿
 C 中央大教授 岩尾 裕純殿
 C 日本建築センター専務理事 三浦 忠夫殿
 C 共立女子大助教授 松島千代野殿
 C 東北放送監査役 内ヶ崎賢五郎殿
 C 立教学院事務局長 秦 二郎殿
 C 東京教育大教授 細田 友雄殿

B 都立立川短期大講師 吉田 幸弘殿
 C 東大助教授 高瀬文志郎殿
 C 都立大教授 関 嘉彦殿
 C 中央大教授 久松栄一郎殿
 B 立教大講師 大橋 泰二殿
 B 工学院大助教授 長坂 舜二殿

C	立教大教授	武沢 信一殿	A	日本女子大教授	
C	東大助教授	西川 治殿	B	青山学院大教授	道 喜美代殿
A	日本女子大教授		C	明治学院大教授	森 繁雄殿
B	お茶の水女子大教授	中島 斌雄殿	B	東京教育大助教授	重田 信一殿
B	日本大教授	笠原 正成殿	B	日本大教授	井原 忠治殿
A	成蹊大教授	松尾 登殿	B	日本大教授	阪本 泉殿
A	国際教育振興会理事長		C	慶大教授	内山 正熊殿
A	中富商事重役	中富 光国殿	C	神奈川大教授	大河内正陽殿
B	日本女子大講師	田端 光美殿	C	セミナー・ハウス元職員	新保 清子殿
C	早大教授	佐島 秀夫殿	A	東大名誉教授	冲中 重雄殿
C	一橋大助教授	田内 幸一殿	C	東大教授	小倉 安之殿
C	東大教授	小山 弘志殿	C	東大教授	藤井 隆殿

○松下幸之助氏(松下電器産業会長)より
施設拡充資金に三、〇〇〇万円の寄付

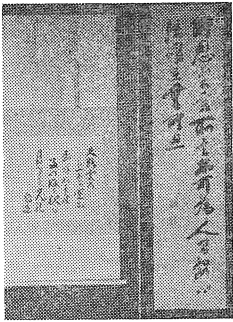
——教官宿舍兼個別指導室新築のため——

驚嘆すべき大きな寄付金が与えられた。教授と学生がセミナー・ハウスを活用し、二年間にあげたその効果的な実績が松下幸之助氏の共鳴を呼んだのである。こうした美しい話題の中で若い学生が感動的な学問修練の経験を積むところが大学セミナー・ハウスなのである。

ユニット宿舍にトイレがないことが高齢の教官には大変不便であったらしい。ことに雨天に出合ったときには、学生と個人

的に話し合うときとか教授が翻訳のためとか原稿書きをするときには、従来のユニット宿舍では少しく不便だったので、目下の構想としては教官宿舍と個別指導室を兼ねた建物を建てることにしている。おそらく松下記念館と名称し、本年一月末に落成をみることとなる。一〇名以内の小グループ用に二室設けるから小規模なゼミや共同研究のまとめなどには好適の場所となる。

B	成蹊大教授	安藤 英治殿	A	一橋大名誉教授	石田竜次郎殿
C	東大助教授	中川 一朗殿	B	立教大助教授	中島 力殿
A	セミナー・ハウス専務理事	飯田宗一郎殿	C	東大教授	吉川 春寿殿
B	早大教授	村松林太郎殿	B	専修大教授	高橋忠次郎殿
B	東大教授	前田 護郎殿	C	商店主	芝川 栄三殿
C	明大教授	内田 章五殿	B	早大助教授	出居 茂殿
B	早大教授	村松林太郎殿	C	武蔵工大助教授	木村 富夫殿
C	東大教授	前田 護郎殿	C	共立女子大助教授	友部 直殿
B	東大教授	内田 章五殿	A	三菱電機社員	大塚 博殿
A	東大松田智雄教授夫人	松田 稔子殿	B	早大教授	村井 資長殿
B	早大教授	村松林太郎殿	C	協和銀行員	川畑 勝義殿
C	東大教授	内田 章五殿	A	ICU教授	都留 春夫殿
A	日本女子大教授	石橋 秀雄殿	A	日本女子大教授	石橋 秀雄殿



新渡戸先生筆(左)
と福沢先生筆(右)

▽▽千人会と私△△

電気通信大学
昭和42年度卒
犬塚 博

はじめの京都の冬は風が格段に冷たく、まだその寒さになれない私をいささか閉口させています。思えばあの八王子の丘の上も随分と寒かった記憶があります。きつと今頃は毎朝霜が真白において、霜柱が勢いよくのびているでしょう。

昨年の一二月にセミナー・ハウス・ニュースをお送りいただきましたが、一ヵ月余り出張のため京都を離れておりましてので、新年になってから拝見しました。そして

■二大教育家の掛軸

新渡戸稲造先生筆
「久路雲の上なる空に出津ぬれば雨のふる夜も月をこそ見れ」
上代たの先生寄贈

福沢諭吉先生筆
「所思不可言所言不可為人間安心法唯在貫所思」
小城正雄教授寄贈

上代先生は新渡戸博士の愛弟子の御一人にして、セミナー・ハウ

て千人会のことをはじめて知り、私が大学時代にセミナー・ハウスから受けました数々の貴重な教訓に対するご恩返しに気持とこれからさき、セミナー・ハウスでのさまざまな想い出を忘れることなく生かして育つてゆくためのきずなとして、千人会の会員にしたいです。

会費は誕生日にお送りするのが本来ではありますが、六月と十二月とに分けてお送りしたいと思えます。今回は第一回分として五千元を同封いたします。

東京を離れてしまい、セミナー・ハウスをお訪ねする機会もほとんど失われてしまいました。私の心の中では強くその精神が生きております。ご発展を祈っています。

(三菱電機社員)

スの大黒柱の御一人。
小城正雄東大教授(ドイツ語)は企画委員の御一人にしてセミナー・ハウスの協力者の御一人として大切な裏方さん。小城先生の御尊父が慶応義塾卒業の時に福沢先生が書いて下さった直筆。いずれも立派な家宝として保存されていたものですが、たくさんの人に見てもらうためには、そして二大教育家の教訓を若い人の人生に生かすためにはセミナー・ハウスに掲げるのもっともふさわしい利用方法であるとのご意見で寄贈下さったものである。

第12回大学共同セミナー

主題 ▽ 文字を考える

〔昭和42年11月23・24・25日〕

【全体講義】

文学研究者の一人として

立教大学教授 手塚富雄氏

【セクション別指導者】

A、ドイツの詩と日本の詩

東京大学助教授 神品芳夫氏

B、ドイツの小説をめぐって

早稲田大学講師 石井不二雄氏

【運営委員会】

〈委員長〉

東京大学教授 小城正雄氏

〈委員〉

東京女子大学助教授

根岸愛子氏

【参加学生】

六五名(うち女子四二名)

東京女大(一〇)、津田塾大(一〇)、上智大(六)、日本女大



手塚富雄先生

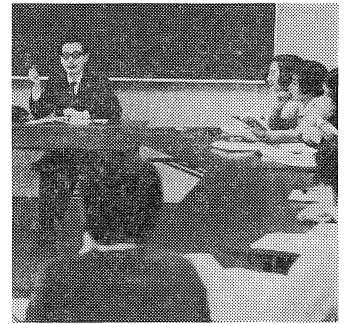


全体講義

(五)、東大(五)、ICU(五)、早大(四)、武蔵工大(三)、外語大(二)、お茶の水女大(二)、青山学院大(二)、慶大(二)、電通大、都立大、立大、明大、神奈川大、共立女大、横浜市大、国学院大、桐朋学園大各一名

【主題の趣旨】

多くの大学に文学部が設けられており、文学に親しんでいる人は多いように思われるが、はたしてわれわれは真に文学を理解しているといえるだろうか。それを反省し現代に生きるわれわれとして、文学を手がかりに、人生と歴史とを考えてみたい、というのがこの大学共同セミナーの目的である。



神品先生のセクション風景

←← ほんものを求める 学生の集うところ →→

A セクション指導教授 神品 芳夫

セミナーの形で文学について実りあるつどいをするのはむずかしいことである。参加者のめいめいがちがった要求をもち、しかも自分の内にある要求が何であるかを、かならずしもはっきり意識しているとはかぎらないからである。何度かセクション演習を重ねるうちに、参加者のもっている要求のなかに共通な要素があることに気がついた。それは、なんでもよいからほんものに触れたいというひたむきな気持である。この願いは文学に接する基本的態度として正しいものであろう。なんでもよいからというものが、指導に当たる者としては困るところであるが、とにかく自分がふだん心をこめて読んでいるものを差し出せ

ば、相手は、受容するにしろ反発するにしろ、真剣に反応してくれるものだということがわかった。おそらく学生諸君はこういう態度を冒頭に行なわれた手塚先生の全体講義から敏感にかみとってきたのだと思う。先生のお話の滲透力はやはりたいしたものである。それにしても、わたしはよい学生にめぐまれていたといわざるをえない。みんなすぐれているけれども、点取り虫の優等生タイプではない。自分の学校ではいつも点取り虫たちにしてやられ、優秀なわりには目立たないといった型の人たちが多くに思った。他の面からいうと、人間的で、自分に忠実な怠け者ということもできよう。『アンナ・カレーニナ』の冒頭の文句をもじっていえば、優等生はみんな一様だが、怠け者はじつにさまざま怠け方を示す。それを観察するのは興味ぶかいことである。ことばというものはおもしろいものである。何時間語り合っても相手がどういう人間かわからないことがあるかと思うと、なにげなく洩らす一言のなかにその人の生活のすべてがあらわれる場合もある。わたしの受け持った学生二十余名は方々の大学から集まった人たちだったが、たった三日で、だれがどこの大学の学生か区別がつかなくなり二十数名の個人だけが私の頭に残ったのである。これはすばらしいことだった。

ふたたび文学についてのセミナーのむずかしさに話を戻せば、この種の集まりが成功しにくいのは、文学について話し合うということ自体にある種の矛盾がひそんでいるからであらう。文学はその本質において孤独の作業であるほかならないからである。孤独の穴からしばしば出てきて、人々と接触を保つことももちろん不可欠である。しかし、セミナー・ハウスの食堂や演習室が若さにあふれる明るい学生たちの声に充ち、和気あいあいの雰囲気包まれるとき、ミューズの神は面映ゆくなつてにげ出したくなるらしいのである。みんなでのしく語り合うことはたいせつだし、歌をうたうのもけっこうである。しかし、どの顔もすっかりして、重症の孤独患者はいないようだったから、私はあえて、人間にとっては孤独をつきつめて生きることが重要であるということを強調したい気持になった。ほんとうによい仕事は孤独のなかでしか生まれえないというの、なにも文学にかぎったことではあるまい。私は生まれつきあまのじゃくのせいもあって、セミナーのあいだもたのしいふんいきに水をさすようなことを口にしたように思うが、それはすべて今といった気持を逆説的に表現したまでのことであった。私の言葉をまともにとつて白っちゃけた気持になった人がいるかもしれないので、この機会に弁明しておきたい。

大学から離れた
討論の場・・・

Bセクション指導教授
石井 不二雄

三日間、セミナーに参加した学生諸君と一緒に暮し、一緒に本を読み一緒に話をしてまず感じたことは、これらの学生諸君が日頃教室で接している学生たちとはどこかちがうという印象であった。いつも教室で会っている学生たちと比べて、セミナーの学生はずっと朗らかであり、自ら進んで発言したり討論しようとし、意欲と積極性に富んでいるようである。勿論、教室の学生の中にもこういう活発な学生はいらるし、セミナーの学生の中にも終始沈黙を守るだけの引っ込みがちな学生はいたけれども、全体としてみるとセミナーの方が積極的な学生の比率がずっ

手塚・石井両先生とともに



と高いように思えるのである。しかし考えてみると、セミナーの予告をみてそれに応じようという学生は、学生全体からみれば、ほんの微々たる割合しか占めていないわけであり、また応募するということそのものがすでに一つの積極的な行為なのであるから、こうして集まってきた学生諸君が全体として積極的であるのは当然のことである。学生全体の中の最良の部分が集まってきていた、ということが出来よう。従って、セミナーの前にひそかに抱いていたような、学生の発言がなくて時間をもてあますことになるのではないかという心配は、幸いにしてまったくの杞憂であった。

しかし、その発言の仕方、討論のやり方ということになると、あまり上手であるとはいえないような気がする。それ以前の意見を十分に踏まえていない飛躍した論や的外れな論が飛び出して戸惑ったことも再三あり、他人の考えに自分の意見をかみあわせて有効に議論を発展させてゆく訓練が足りないことを感じさせた。しかし、はじめの頃ひじょうに目立ったこういう傾向も、三日経つうちに次第に少なくなつて、討論がだんだんはつきりした方向を取るようになってきたことを考えてみると、やはりこのセミナーがそういう訓練の数少ない場の一つとして役立つという文学をあくまで自分たちの生き方

とかかわらせながら考えていこうとする意欲は並々ならぬものがあった。この主体的なかわりを保ったままで、もっと客観的に、もっと幅広くものを考えていけるようになってゆくことだろう。一人一人の考え方がそれぞれが違って当然なのだということ、万人に共通する客観的真理があるのではなく、あるとすればそれはたぐさんの主観性の重なり合い、せめぎ合いの中から次第に浮び上がってくるものなのだということ、それをはつきり認め合った上でなければ討論は実を結んでゆかないだろう。

感動を呼ぶ体験

旭岡 勝義

「それならば最大遺物とは何であるか。私が考えてみますに、人間が後世にのこすことのできる、そうしてこれは誰にもこのことのできるどころの遺物で、利益ば

卒業記念共同セミナー

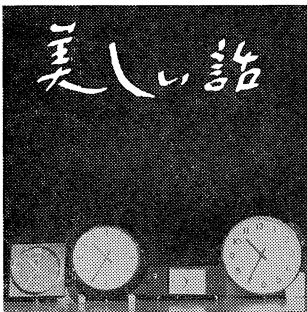
大学生活から社会生活への新しき門出の前に、もう一度諸君を共同セミナーにお招きします。
期日 昭和43年3月14日・1泊
日本人の生活と意識
東京大学総長 大河内一男氏
日本経済の特質と理念(仮題)
富士銀行頭取 岩佐凱美氏
セクション指導 大学教授数名

かりあつて害のない遺物がある。それは何であるかならば勇ましい高尚なる生涯であると思います。……(中略)……失望の世の中にあらずして希望の世の中であることとを信ずることである。この世の中は悲歎の世の中でなくして歓喜の世の中であるという考えを我々の生涯に実行して、その生涯を世の中の遺物としてこの世を去るということでもあります」(内村鑑三著『後世への最大遺物』)。

朝に富士の霊峰を遙かに仰ぎ見て夕に天上に咲き乱れる星々の祝福の光を身に受けて過ぐす大学セミナー・ハウスでの日課は実に楽しいものである。それにもまして各セミナー室における白熱した討論は、僕にとって忘れたい感動を呼び起こすのである。ここではどの大学に在学していようが、男子学生であるうが、女子学生であるうが、そのようなことはまったく問題ではなくなってしまう。すべてがなんのへだてもなく安心して語り合える友なのである。権

威が精神を持つような卑しさはまったくない。真実のみが、真理のみが力をもつのである。人を信じること、愛することが、これほど美しいものであろうか。真剣に語り合える尊さ、信じるこのかけがえのない思いやらざるを得ないのである。卑近な今日の精神状況にあつて真の精神の力強さを想うのである。力となりうる精神とは何かを考えさせられるのである。

しかし感動するだけで終ってしまつてはならない。この精神を生かすも殺すも、我々自身にかかつているのだということ忘れてはならない。いつの時代にあつても、真理の敵に向かって強く「否」といひ得ることこそ、時代に生き人間といえるのではないかならうか。そしてこの使命を自己の責任として実践してゆくことが、大学セミナー・ハウスを愛するということではあるまいか。またそうでなかつたらセミナー・ハウスの存続の意味はなくなってしまうだろう。(東大教養学部二年)



時計の寄贈

クリスマス集いの当日とその後利用されたゼミナールの学生たち、セミナー・ハウスの職員一同が参加した今年のクリスマス寄付金は合計二万四、七九三円に達した。これで講堂、図書館、本館、ラウンジ、館長室に時計をつけることができました。

第13回大学共同セミナー

(昭和42年12月18・19・20日)

主題▽現代とキリスト教思想——出会いと決断——

【全体講義】

A 現代思想とキリスト教
東京神学大学助教授
佐藤敏夫氏

B 現代日本の精神状況
東北大学教授
宮田光雄氏
(ゲスト)

東大名誉教授
ICU教授
南原 繁氏
長 清子氏
南原先生とセミナー指導の先生たち
(明治大正・昭和の顔が並んでいる)

【セクシオン別指導者】

A 愛における自由の問題(ルタ
ー)

B 神における自由(パウロ)
青山学院大学助教授
荒井 献氏

C 賭けと決断(パスカル)
東京女子大学助教授
小川圭治氏

D 現代人と不安(キルケゴール)
東京神学大学助教授
能沢義宣氏

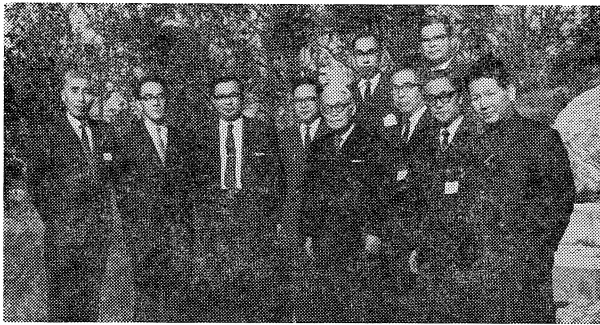
E 生と平和の思想
(シュヴァイツァー)
東京大学助教授
杉山 好氏

F 悪の問題(アウグスティヌス)
東北学院大学助教授
茂泉昭男氏

G 日本人と信仰(内村鑑三)
立教大学教授
中沢治樹氏

【運営委員会】
(委員長)
東京女子大学助教授
小川圭治氏

(委員)
上智大学教授
鈴木 皇氏
日本女子大学女子教育研究所員
山本和代氏



【参加学生】

一〇八名(うち女子五三名)
東京女大(一六)、早大(一一)、
東大(一一)、日本女大(八)、外
語大(七)、津田塾大(六)、青山
学院大(五)、都立大(四)、立大
(四)、独協大(四)、明治学院大
(三)、中大(三)、静岡大(三)、
電通大(二)、慶大(二)、成蹊大
(二)、弘前大(二)、上智大(二)、
東京神大(二)、一橋大、学芸大、
神奈川大、千葉大、東北大、東経
大、同志社大、東京農大、立正女
大、東京文化短大各一名

【主題の趣旨】

いかに生きるべきかという問いは、どのような時代においても、若い人たちによって問いつつづられてきた。昨年度初頭の「実存思想と現代」をめぐる共同セミナーがとりあげたのもこの問題である。そのとき、いかに生きるべきかとの問いは、なにを信じなかに賭けるかという問いと密接に結びついていることをみだした。ことに学生諸君が現代の思想的混迷のなかで自己の存在を正しく位置づけようとそれぞれに努力し求めている姿に接することができた。こうした要求に直面しながら、キリスト教思想が人類の思想史上にどのような働きをし、どのような人間を形成してきたかをふりかえってみることは、現代世界の問題の本質を認識し、かつこれと対決すべき課題を負った日本の大学人として、決してゆるがせにしない関心事である。また明治百年といわれる日本の近代化の歩みのうえでも、そこにキリスト教思想が果たしてきた役割はいちじるしいものがあり、これによって自己の人間と思想を形成した先進の業績に思いをひそめることは、私たちに対する大きな励ましである。

共同セミナー参加の理由

生きた人格との
出会いを求めて

小山田 秀生

私がこの共同セミナーを好む理由は何故であろうかと自問してみました。するとふとこんな点ではないかと思ひあたりました。まずセミナー・ハウス全体に満ちている真理に対するまじめな情熱と、また一人一人の人間に対する誠実な信頼とが最もし出す何ともいえない雰囲気ゆえです。

セミナー・ハウスは、現実としてある決定的な解答を与えてくれるというよりは、私たちがこれから歩むであろうと思われる可能性としての、様々な真理や理念、そして生きた人格との出会いと対話を可能にしてくれるにもっともふさわしい場のひとつだろうと思ひました。私たちは、セミナー・ハウスの中では、身分や学校や年齢、性別の差を越えて共通のテ

したがってこのセミナーは、キリスト者であるなしを問わず、むしろキリスト教のことを知らず、信仰をもたない人たちのために、キリスト教思想の研究者であるとともにみずからその信仰によって生きている先生方との対話の場所をつくるのが目的である。

マのもとに真剣な応答をかさねました。ちょうどそのような出来事があるところでも自由になされるのきたることを期しつつ、努力してゆきたい、そんな気持が湧き起こってくるのをおぼえているところです。
(東北文学部)

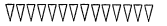


にぎやかにクリスマス晩餐会

考えるための：クリスマスマスの集い (12月20日)

講話は北森嘉蔵先生

大浜信泉先生ご夫妻を主賓に



セミナー・ハウスは宗教行事としてクリスマスマスを催すのでなく、現代人として精神的活力を宗教的に追求するためであり、一方においてはこの一年間にセミナー・ハウスを利用した先生方や学生諸君と楽しく感謝を含めた交歓の集いを持つことにある。

食堂、本館の飾りつけは毎年上手になり、この方にもつばら学生奉仕グループの分担で、材料の買込み、考案実施のため二度も泊り込みをされた、奥、佐久間の両君、浅岡、三根、寺尾、木村の諸嬢などのご苦勞に謝したい。

なお久しぶりで前理事長の大浜信泉先生ご夫妻がご出席され、クリスマス・ケーキにナイフを入れるという楽しい光景もみられた。松田智雄教授の奥様と令嬢、吉阪

よいかな……大浜先生ご夫妻



隆正教授のご一家、杉山好先生のご一家など家族組があり、パーティーは一段とにぎわった。

今年も第一三回共同セミナーの参加学生がこのクリスマスに合流したのと、運営委員であられた小川圭治、杉山好両先生がこの方にも責任を持って下さったのが大変好都合であった。

今年もパーティーの進行は日本女子大の山本和代先生を煩わし、奥君の協力で好調に進行し九時三〇分名残りを惜しんで閉会。

□クリスマス・プログラム□

【第一部 講話と音楽】

司会 東京女子大学 小川圭治氏

●講話

「クリスマスマスの現代的意義」

東京神学大学 北森嘉蔵氏

●音楽

解説 東京大学 杉山 好氏

パッハーオルガンバストラ

シュツーククリスマス合唱曲

パッハー・マグニフィカト

クリスマスソラール

【第二部 パーティー】

司会 日本女子大学 山本和代氏

①晩餐会 ②プレゼント交換

◇参加者 学生一三〇名、先生と

家族二〇名

不思議な共感を体験して・・・



セクシオン指導教授 杉山 好

この第一三回共同セミナーは、晴、雨、快晴という極めて弁証法的な天気に恵まれたこの丘のふとここで、全体講義とセクシオン討議のあいだをさらに弁証法的に往復しつつ、文字通り息つくいとまもなく終ってしまっただけ。参加したある学生が言ったとおり、もう一日欲しい、というのが私にも偽りない実感であった。というのは全体講義がゲストで来てくださった南原先生と長先生の極めて充実したお話しまで合わせた結果、計四つということになった結果、いわばごちそうをあまり立て続けに食べさせられて、セクシオンの胃袋のほうで、短時間でとうとう消化しきれなかったのが実情だったからだ。それにセクシオンの方も、それぞれに全存在的対決を要求する人物とその思想をかかえて、これを全体講義の問題にかみ合わせてゆかねばならない。ほぼ二時間ずつ四回のセクシオン演習で一五名前後のほとんど初対面の学生諸君とこの課題を担いけることは、ともかくしんどいことであった。

ほとんど初対面と書いたが私の場合、学校の教室で顔なじみの諸君が三人ほどいたが、ここへ来て起居、食卓をともし、セミナー室のテーブルを囲んで座ってみると、教室で会うのと全く違った、一個の裸の人間同士が、生きる道を求めて学びを共にしつつ対峙している不思議な共感があるのだ。ソリダリティーとは、おそらくこういう消息をこそ指すことばかと思う。先生も同じ人の子という弱さを知っての「なれあい」だけではあるまい。むしろ「われ弱きとき、最も強し」というあのパウロの弁証法の生命的躍動がわれわれを押し出し、真理と人生をめぐると同じ戦いの場に立たせてくれているのを覚える。このことは講師たち相互間のソリダリティーについてもそのままではまると思われた。予めこれといって打ち合わせたわけでもないのに、それぞれ的人間的、社会的立場を越えた、ある一つの共通の姿勢が、このセミナーのフィナーレを飾ったあの七人の講師たちの "How I became a Christian." という実存的証言のなかに、くっきりと現われていた。私自身に関して言えば、多くのおそれとおのきなしにはとうとう語りえなかった自己告白であった。

それについても、国をあげての未曾有の大戦争と祖国の決定的崩壊という一種の終末的危機のなかで内面的革新と人生行路の一大転換を経験した私などの世代が、「平和と幸福と繁栄」を相言葉とする現代日本の学生諸君にどう受けとめられたであろうか。年末、年始にかけて思いがけなく多くの参加者からの便りに接し、私どもをゆさぶったあの実存的震撼の少なうともいくばくかが、ひとりひとりの若きたましいのうちに反響し始めたことを知って、不思議な驚きを禁じえない。南原先生まで入ると、明治、大正、昭和と近代日本の各世代が期せずして一堂に並んだ出合いのひとときであったが、願わくばこの瞬間を通じて火花を発したあの「なにもの」かが、瞬間の昂揚や感激に終らず、参加者それぞれの日常の場で、その属する各大学の生活の中で持続的に生き続けて、「世の光、地の塩」たる底力を發揮するにいたらんことを。マスプロの人間疎外、名声と伝統の形骸、真理よりも力の時代的風潮に骨のずいまでもしばまれつつある現代日本の大学の危機をくいとめる抵抗のくさびとなるのが大学セミナー・ハウスの使命であるとするならば、共同セミナーの意義も、実にそうした使命的小集団の形成にこそあるといふべきではなからうか。そしてその小集団の揚げる標語は「われらは真理に逆いて力なく、真理に順いて力あり」(第二コリント一三一八)であると確信する。

緊張と弛緩 — 合宿ゼミの効果 —

東京大学助教 菊地 昌典

まだ正月気分がぬけやらぬ一月八日から、東大教養学部教養学科の学生諸君一四名と、二泊三日の合宿ゼミをもった。恐らく、われわれのゼミくらいしか利用者はいないのではないかと予想は見事にはずれ、東京女子大はじめいくつかの大学がすでに勉強をはじめていた。私は、いままで数回、このセミナー・ハウスを利用したことがあるが、厳冬に、しかも正月あけ早々の利用は初めてだったので、夜の寒気にいささか恐怖をいだいていたのだが、快適な暖房と、それ以上に冬の夜空にまたたく星の美しさが、朝九時から夜一〇時すぎまでの報告と討論で疲労した頭脳を十分にやしてくれた。今度の合宿ゼミナルで、あらためて、「合宿」ということの利点をいくつか痛感させられた。それは、ゼミナルを効率的におこなうためには、どうしても、打ちとけた雰囲気が必要であり、そのためには、合宿がきわめて能率的だという点である。今度のゼミは、大学院進学や就職のすでにきまった最高学年から、教養学科へ進学の内定した教養学部二年生をふくめた混成だったが、合宿ゼミで、上級生、下級生のわだかまりは、急速に消え、なごやかな、し



菊地ゼミのグループ

かも厳しい雰囲気、で、終始することができた。第二は、長時間、討論できるといふ利点である。一つのテーマを、時間の制限なく議論しあうということは、問題をほりさげ、展開していく必須の条件だが、それがかなりの程度満足させられた。とりわけ夕食後の時間がたっぷりあることは、合宿ならではの得られぬ利点である。第三は、環境である。私は、昼食後、学生たちと丘をおり、鄙びた部落の小道をとったり、枯れすすきの小山をのぼるなど一時間ほどの散歩をたのしんだが、緊張した神経を、自動車事故や騒音にわずらわされずに、ゼミの休憩時間をつかってできることは大変ありがた

いことであつた。緊張と弛緩がうまく組み合わせられる環境は、大澤セミナー・ハウスのもつ最大の特権といえるかも知れない。しかし昨夏きた時にはなかった住宅が、眼下に点在しているのを見て、宅地化の激しさにおどろくとともに次第に、周辺の環境が破壊されていくのではないかと、ということも憂慮せざるをえなかった。

この絶好の環境をなんとか守りとおしてほしいと思うのは、私一人だけではないだろう。合宿ゼミをやりたいと思つていて、そして、各ゼミが時には合同して、親睦をふかめ、また交流しながら、新しい学問への姿勢をうちかためていきたいものと希望している。

◎ 会員校の積極的な利用を！

第二回会員校事務連絡会開く

(昭和42年11月15日)

会員校との連絡を密接にするため事務連絡会を設けることとし、その第一回を四一年一月一二日あたかも講堂の地鎮祭の当日に開いたまま延びていたが、新築の講堂と図書館を参観する目的もかねて、第二回の連絡会を晩秋の午後二時より新講堂を会場として開催した。

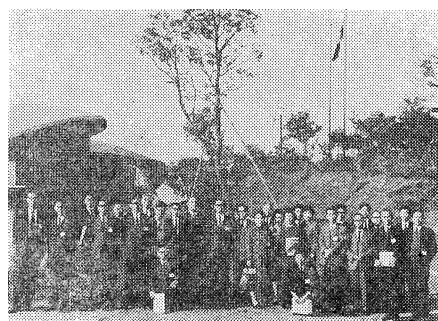
また共同セミナーは本法人が各大学に奉仕する重要な教育活動なので、ポスターやチラシの配付についての取扱い方、学生に対するPRの方法など適切な助言を求められた。五時閉会后、引き続き食堂で晚餐を共にし、懇談の後六時半解散した。

出席者は二二大学の教務・学生担当者三九名で盛会であった。一橋大学教務課長後藤政勝氏を議長に推薦し、協議にはいった。まず飯田事務理事より会員校の協力に対する感謝、ことに窓口で学生の世話をして下さる担当者に対するお礼を述べ、運営の基本的方針は会員校の利用が中心なので、各大学の新入生オリエンテーション、各教授のゼミナルなど

出席者側からは申込方法、利用の場合の時間、冷暖房費、教職員研修会の利用法、非会員校との共同研修会の経費等々についての質疑と意見発表があった。

【当日の出席校および出席者】

- 今村久寿夫 (東大・本郷)、小林武和 (東大・駒場)
- 後藤政勝 (一橋大)
- 高木統他郎 (東京医歯大)



事務連絡会出席の方々 (講堂前の広場で)

- 吉田豊、竹内富造 (東京農工大)
- 広中益次郎、大門竜夫 (お茶の水女大)
- 山本唯雄、戸田孝司 (東京外大)
- 佐々木正雄、田中太郎 (横浜国大)
- 加藤実 (都立大)
- 高瀬敏行、滝沢玄吉 (早大)
- 古布フミ、堀美代子、宮内和子 (日本女大)
- 岡田隆輝、信太四郎 (明大)
- 天野成光、隅礼三 (中大)
- 岩原盛勝 (青山学院大)
- 奈良信雄、住田篤 (立大)
- 葛西文、飯田早苗 (東京女大)
- 川本文三、川嶋辰彦 (武蔵工大)
- 松本公宏、篠原直俊 (成蹊大)
- 江尻美穂子、坂上昌幸 (津田塾大)
- 上西守夫 (順天堂大)
- 高橋勝彦 (共立女大)
- 石谷行、中村純作 (ICU)
- 木川敏治、久保肇 (神奈川大)

●利用状況

明治学院大教授	早大教授	東京女子大講師	都立大教授	都立大教授	名古屋市立保育短大助教授	平林 武雄	東工大教授	松田 武彦
早大教授	原田 種臣	加藤 寛	加藤 寛	比留間 哲	東京工大E・S・S	湯浅 欽史	北海道拓殖銀行研修会	飯田 貫一
都立大教授	平山 輝男	林 栄夫	林 栄夫	比留間 哲	都立大助教授	中村 孝俊	木村 駿	矢野健太郎
都立大教授	岡部 作一	石橋 秀雄	石橋 秀雄	増田 義男	立大助教授	成蹊大教授	窪田 佳尚	大須賀政夫
都立大教授	岡部 作一	石橋 秀雄	石橋 秀雄	増田 義男	中大助教授	永福町教会修養会	守屋 博	田島 恵児
都立大教授	岡部 作一	石橋 秀雄	石橋 秀雄	増田 義男	中大助教授	フェリス女学院大英米文学研究会	山本 英治	植竹 信一
都立大教授	岡部 作一	石橋 秀雄	石橋 秀雄	増田 義男	中大助教授	フェリス女学院大英米文学研究会	山本 英治	植竹 信一

◆十月

慶大教授	獨協大写真部	明治学院大教授	東大助教授	白梅学園短大教授	日本女子大助手	加藤 寛	東京工大E・S・S	飯田 貫一
獨協大写真部	明治学院大教授	東大助教授	白梅学園短大教授	日本女子大助手	加藤 寛	湯浅 欽史	法大教授	矢野健太郎
獨協大写真部	明治学院大教授	東大助教授	白梅学園短大教授	日本女子大助手	加藤 寛	中村 孝俊	成蹊大教授	池井 優
獨協大写真部	明治学院大教授	東大助教授	白梅学園短大教授	日本女子大助手	加藤 寛	成蹊大教授	安藤 英治	大須賀政夫
獨協大写真部	明治学院大教授	東大助教授	白梅学園短大教授	日本女子大助手	加藤 寛	飯田 貫一	矢野健太郎	池井 優

■施設拡充資金寄付者

(第4回報告・昭和42年10~12月)

中央大学助教授	中央大学増田ゼミ殿	1,000円	東京都立大学金沢ゼミ殿	1,000円
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授
中央大学増田ゼミ殿	1,000円	成蹊大学安藤ゼミ殿	1,000円	成蹊大助教授

■寄贈図書

昭和42年10~12月

成蹊大助教授	樋口 進	「比較経済史研究年報」	早大商学部市川ゼミ殿
日野協力会(部課長セミナー)	窪田 佳尚	「歴史する心」	増田 四郎殿
東京芸芸大文部教官	佳尚	「人間拡張の原理」	竹内書店殿
順天堂大教授	守屋 博	「八王子市史」下巻	八王子市役所殿
東京女子大講師	山本 英治	「工業鉍物化学」	金沢 孝文殿
上智大教授	J・ニッセル	「明治学院九十年史」	明治学院殿
日大文理学部写真研究会	宮川 透	「資金会計論」	染谷恭次郎殿
東京外語大助教授	宮川 透	「ホワイトカラーの職務給」	「ヨーロッパの賃金」
東大「科学論」討論会	加藤 諱三殿	「管理職の職務給」	「経営近代化のための要員管理」
一橋大広告研究会	大塚 久雄殿	「アメリカの職務給」	「日本における職務評価と職務給」
日経連職務分析センター(職務分析員養成コース)	加藤 諱三殿	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
日興証券(営業管理者講習)	加藤 諱三殿	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
東京工大教授	矢野健太郎	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
慶大助教授	池井 優	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
電気通信大教授	大須賀政夫	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
青山学院大助教授	田島 恵児	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
明治学院大教授	重田 信一	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
慶大助手	植竹 信一	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
明治学院大講師	高橋 勇悦	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
中大助教授	村田 稔	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
東京工大助教授	益子 正巳	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
日本国際問題研究所	長山 義男	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
慶大教授	水野 正夫	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
中大教授	樺 俊雄	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
東京告白教会青年部	高田 清朗	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
電気化学工業(中堅社員研修会)	久野 洋	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
都立大助教授	良知 力	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
慶大教授	渡部 重勝	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
法大助教授	満尾 寿男	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
日本産業カウンセラー協会(全国研究集会)	元吉 功	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
電気通信大教授	森脇大五郎	「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
玉川大教授		「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
明治学院大教授		「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」
都立大教授		「ヨーロッパの賃金」	「ヨーロッパの賃金」

(次頁へつづく)

佐藤喜一郎殿

■利用回数調べ

(昭和42年4～9月)

【A】大学

- 1 早稲田大学 二一回
- 2 慶応義塾大学 一七回
- 3 中央大学 一五回
- 4 東京大学 一三回
- 4 東京都立大学 一三回
- 5 日本女子大学 一一回
- 6 一橋大学 一〇回
- 6 青山学院大学 一〇回
- 6 明治学院大学 一〇回
- 7 法政大学 九回
- 8 東京工業大学 六回
- 8 日本大学 六回
- 8 白梅学園短期大学 六回
- 9 東京農工大学 五回
- 9 武蔵工業大学 五回
- 9 横浜国立大学 五回
- 10 立教大学 四回
- 10 立正大学 四回
- 【B】ゼミナール
- 四回 田中未来(白梅短大)
- 三回 栢野晴夫(法大)、石川与吉(立正大)、泉暹(国際商科大)
- 二回 谷口晋(東大)、藤沢袈裟利(農工大)、杉原一昭(横浜国大)、伊丹潔(都立大)、酒枝義旗(早大)、岩尾裕純(中大)、関田寛雄(青学大)、尾形憲(法大)、山田良之介(武工大)、吉田裕(明学大)、高橋勇悦(明大)、藤田たき(津田塾大)、井出則雄(白梅短大)、川原栄峰(早大)、一番ヶ瀬康子(日女大)

(利用状況つき)

共立女子大学歴史研究部	水本 浩	都立大教授	半谷 高久
立大教授	津田塾大教授	日興証券(営業管理者講習)	前川 祐一
早大碧稲会	慶大講師	慶大講師	渡辺 彰
早大教授	井上 宇市	明治学院大学生部職員研修会	奥山 典生
三菱レイヨン(社員研修会)	高畠 通敏	立大助教授	重田 信一
立大助教授	◆十一月	明治学院大教授	津田 昇
慶大助教授	慶大助教授	明治学院大教授	近藤 基吉
明治学院大助教授	池井 優	専修大教授	関田 寛雄
都立大教授	吉田 裕	青山学院大助教授	荒木 峻
都立女子大教授	団 勝磨	都立大教授	早大助教授
共立女子大教授	速川 浩	多摩中央信用金庫(研修会)	早大助教授
千代田運輸(指導員セミナー)	今村都南雄	厚生課長研究会	佐藤 明人
中大助手	慶大法律相談所	東京経済大助教授	荒川 幾男
慶大法律相談所	寺沢 芳雄	東大教授	山崎不二夫
都立大助教授	横山 雄一	立大GFS修養会	岩井 肇
東京理大助教授	平井 久	日大教授	岩井 肇
上智大心理学研究室	東 洋一	明治学院大教授	金井信一郎
都立大教授	山田 孝雄	立大助教授	石橋 秀雄
日大教授	佐藤 経明	早大助教授	酒卷 俊雄
都立商科短大助教授	電気化学工業(中堅社員研修会)	早大教授	伊藤 誠
都立商科短大助教授	日大執行部研修会	東洋英和女学院短大教授	岩瀬 孝
一橋大助教授	内田 幸一	青山学院高等部修養会	黒田 成子
早大教授	内田 満	慶大助教授	村田 昭治
都立大教授	高峯 一愚	立大教授	山田耕之介
白梅学園短大教授	片山 清一	早大教授	村松林太郎
東京工大教授	益子 正巳	早大言語科学研究会	電電公社(研究管理者研修)
共立女子大教授	小川 文代	都立大助教授	高田 清朗
慶大教授	内山 正熊	東京神学大学長	高崎 毅
都立大教授	天利 長三	お茶の水女子大教授	山西 貞
青山学院大教授	久保岩太郎	都立大教授	柴田 徳衛
都立大教授	田島 栄	慶大教授	小茂鳥和生
立大助教授	久保田 順	早大助教授	市川 孝正
都立大教授	佐竹 一夫	明治学院大助教授	増田 茂樹
青山学院大グロリアス・クワイア	中大講師	桑原 哲郎	明治学院大教授

◆十二月

法大教授	田沼 肇
都立大教授	塩田庄兵衛
都立大教授	沼田稲次郎
早大教授	染谷恭次郎
日大教授	鶴殿 元一
国際商科大講師	泉 伸一
一橋大助教授	米川 伸一
東京女子大短大部カンファレンス	早大講師
早大講師	一橋大教授
一橋大教授	慶大教授
慶大教授	都立大教授
都立大教授	日本建築学生会議関東ブロック
日本女子経済短大講師	中大助教授
中大助教授	国際商科大講師
日本女子大専任講師	白梅学園短大教授
明治学院大学児童問題研究会	明治学院大学児童問題研究会
杉野女子大助教授	玉川大教授
慶大教授	法大助教授
東京芸大講師	早大教授
東大芸術調査探検部	学習院大教授
近藤 正夫	小西 正捷
尾関 守	霜島 甲一
小島 美子	沢山 允茂
戸川 尚	田村 皖司
徳永 哲男	徳永 哲男
松本 正徳	徳永 哲男
小島 蓉子	田中 未来
徳永 哲男	徳永 哲男

■編集後記

二月半ばに一億五千万円募金はほぼ達成の見込みがあった。増田理事長と佐藤後援会長の喜びもさこそ思われる。御二人のご奉仕の姿から、わたしは無私というもののけだかさを知った。(飯田宗一郎)